

東西文明の比較 (17)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

今回はタイムリーな話題から始めたいと思います。7月9日のことです。

神宿る島「宗像・沖ノ島と関連遺産群」が、世界文化遺産に登録されました。宗像大社の沖津宮である沖ノ島、九州本土に近い大島の中津宮、本土の辺津宮、沖津宮遥拝所、新原・奴山古墳群などから構成されています。古代からの信仰を今に伝える島の価値が認められたのでしょうか。島で祭祀が始まったのが4世紀後半で、前回(16)の本稿で述べた「倭の五王」の時代です。沖ノ島は九州と朝鮮半島のほぼ中

間にあり、日本書紀が宗像三女神を「海北道中の道主貴(みちぬしのむら)＝朝鮮半島航路の守護神」と位置づけていることから、大陸への航海安全を祈る祭祀が営まれていたようです。遺跡跡は、巨岩に隣接されており、古代人が岩に聖性を見いだした一例がここにも見られます。

沖ノ島は、1954年から発掘調査が行われ、金製指輪・金銅製馬具・ペルシャ産のカットグラス・「卑弥呼の鏡」と言われる三角縁神獸鏡など、8万点にも及ぶ奉獻品が出土しました。これらは全て国宝に指定されています。

残念なことに、沖ノ島は女人禁制で、男性も年に一度の現地大祭でわずか200人しか入島できないそうです。発掘された8万点の国宝は、宗像大社辺津宮境内の神寶館で見ることが出来るようです。私も年内には見学する予定です。

アメリカ大陸の文明

拙文のテーマは「東西文明の比較」です。つまり、古代日本の文明は、中国を中心とした隣国を通じて、遠くヨーロッパの文明をも取り込み発展したことを

再認識することが目的です。しかし、戦後70余年を経過して見回してみると、日本文明はアメリカの影響が強く反映され、すっかり様相を変えてしまったことに気がつきます。

終戦直後に小学校に入学して、「進駐軍」による教育を受けた私は、何の疑問も感じないままに過ぎてきたことに、今になって反省しています。言うまでもなく、ここで言うアメリカ文明とは、20世紀から隆盛したアメリカ合衆国をいいます。しかし、アメリカ大陸の文明は、日本の縄文時代とほとんど同時期に始まっていたのです。興味深いことは、他の文明と「交流」がないまま、数千年を経てきたことです。更には言えば、祭祀を行い、神殿建設や各種の用具など、エジプト・ローマ・ユーラシアなどと同様な文明を築いています。人類が持つ本能の素晴らしさに驚嘆せずには居られません。

アメリカ文明の始まり

アフリカを起源とする現生人類は、4万年前に世界中に分散を始めました。アメリカ大陸へは長い年月を経て、アジア北東部からアリューシャン列島・アラスカを経由して到達しました。1万5千年前のことです。約2万年前の氷河期で水位は低下。その結果、ベーリング海峡は地続きとなり、バイソンやトナカイなどが移動し、狩猟する人間もそれらに続いて移住しました。アメリカ大陸に最初に移住した民を「クローヴィス」人と呼びます。彼らが残した尖頭器(石の槍先)がアリゾナ州で発見されました。クローヴィス尖頭器といい、全米各地で発見されています。1万2000年前ごろには、クローヴィス人とその子孫は北米全土から南米最南端に到達していたようです。やがて気候は温暖化し、水位が上昇してアジア大陸との往来は出来なくなり、それ以降、16世紀のヨーロッパ人の到来まで、アメリカ大陸は独自の発展を遂げるのです。

広大な大地に展開したアメリカ大陸文化の足跡の研究は、出発したばかりと言われており、余り参考書がありません。この文もわずか数冊の書籍からの

拾い書きです。

メソアメリカ文明とは

メキシコ及び中央アメリカ北西部とほぼ重複する地域で、共通の特徴をもった農耕民文化ないし様々な高度な文明(マヤ・テオティワカン・アステカなど)が繁栄した文化領域を指し、パウル・キルヒホフ(ウィキペディアで参照ください)の文化要素の分布研究により定義された地域を指します。地理的には、北はメキシコのパヌコ川からシナロア川あたりまで、南はホンジュラスのモタグア河口あたりからコスタリカのニコヤ湾あたりまでですが、この境界線は歴史的に一定していたわけではありません。壮麗な神殿ピラミッドなどを現在も残す繁栄した地域です。

メソアメリカでは、

- 定住農村村落の成立(紀元前2000年以後)
- オルメカ文明(メキシコ湾岸；紀元前1250頃～紀元前後)
- テオティワカン文明(メキシコ中央高原；紀元前後～7世紀頃)
- マヤ文明(メキシコ南東部、ユカタン半島、グアテマラなど；紀元前3世紀～16世紀)
- トルテカ文明(メキシコ中央高原；7世紀頃～12世紀頃)
- サポテカ文明(メキシコ・オアハカ地方；紀元前10世紀～16世紀)
- ミシュテカ文明(メキシコ・オアハカ地方；900～1522年)
- タラスカ王国(メキシコ西部地域、ミチョアカン州など；14世紀初～1530年)
- アステカ帝国(メキシコ中央高原；15世紀前半～1521年)

などが興亡しました。

これらの文化はアジア、ヨーロッパ、アフリカの三大陸の文明との交流を経験せず、地理的に孤立した環境で発展しました。そのため製鉄技術を知らず、宗教においても独自の体系を成立させるなど、他大

陸の文明とは際立った特徴を有しています。

神殿文化は紀元前二千年紀の末に起こり、それから約2500年の間、外部世界の影響や干渉を受けることなく自力で発展し続けました。ところが15世紀の末、コロンブスに率いられたスペイン人が突然侵入し、それらを破壊し尽くしたことは、皆様ご承知のことです。

アンデス文明・インカ文明

アンデス文明を考えると、その特異な自然環境に注目しなければなりません。南米大陸の太平洋側には6000m級のアンデス山脈が、南北7000km連なっています。この中央アンデス地帯と呼ばれる地域は、乾燥した砂漠地帯の海岸域(コスタ)、山々が連なる山岳地帯(シエラ)、その東側に広がるアマゾン原流域の熱帯雨林帯(モンターニャ)の三つに大別されます。コスタは、沖合を流れるペルー海流が年間を通じて低温のため、水分の蒸発が少なく、結果、海岸域を乾燥させます。ペルーの首都・リマの年間降水量は10ミリ台です。ちなみに新潟・富山は暖流が流れるため、蒸発する水分は豊富で年間降水量は2000ミリを超えます。ペルー沖は水産資源にも恵まれています。世界有数の漁場です。この漁場の存在は、文明の展開と密接な関係があります。コスタは漁労による人々の定住化をもたらしました。

コスタで獲れた魚は、内陸部の丘陵地帯へも運ばれました。自然環境で見逃せないのはエルニーニョ現象です。赤道直下のペルー沖合では、海流の北上する力が弱まると、赤道反流が力を強めて南下しはじめます。これに伴って水温の高い赤道反流は大量の水蒸気を発して雲をつくり、乾燥砂漠地帯に激しい豪雨をもたらすのです。洪水によって生態系が変わってしまうほどの災害をもたらし、栄養分を豊富に含んだ土を押し流し、農業生産力を低下させることもしばしばあります。自然と共生した点では、日本文明と共通するところがあります。

次号もアンデスについて記す予定です。